



「利他」の恵み

元金融庁長官
元駐コロンビア大使

畑中龍太郎

昨年末の12時間を超える喉の手術で感じたことがある。紙一重の、かなり際どい手術で、せん妄（幻覚）が現れたり、1週間ほど意識が混濁していたようだ。生還できたのは、自分の力や医療者の技量や熱意というより、自分を遥かに超えた大きな「意思」によるものだという気がした、「自分は生かされている」と。だから今、生活的な生死という意味からすれば、半分死んだようなもの（声を失う、食べることが不自由、呼吸が危うい）だが、残った半分で、少しでも自分以外のものの役に立つことができれば、それが生きている意味を示すことにもなろうし、そうした「意思」に応えることにもなるのではないか、と思ったりする。

ヒンズー教の「四住期」では、全ての知識・経験・財産を、インド中を徘徊して、それを必要とする全ての人に分かち与えて無となり生を終える「遊行期」が、人生最終段階の理想とされる。しかし、「他者を中心に考え、相手の利益に喜びを見出すこと（利他）」は言うほどには簡単ではないだろう。「地球環境保全」とか「人生百年」と声高に叫びながら、心底では、ほかの動物や植物の寿命を枯らしながらも、この地球上で人間という一族だけが長生きできればよいと考えるもう一人の自分がいないだろうか。

もう一つは、「利他」の対象が自分の世代だけでなく、子供や孫やそれに続く世代にまで及ぶの

かどうか。J. アタリEBRD元総裁が言うように、今後の世界を導く指針は、「次世代の利益のために行動する社会を構築する」ことだと思



う。しかしここでは、一世代だけでは終わらない「窮極の」利他、「窮極の」持続性が求められる。

では、そうした「利他」を仮に実践出来たとし、迎える人生の終幕にはどんな世界が待っているのだろうか。衰えを客観視できるのは人間だけだと言われる（他の動植物にとって、衰えは即生存競争からの脱落を意味するだろう）。なので、願わくは、単なる延命の時間ではなく、自らの人生を振り返りながら、「老いや衰えを優雅に楽しむエンジョイ・エイジング（魂の成熟）」の時を過ごせればと思うのだが……。ただ、ある年齢になると人生に感激がなくなるとも言われる。その深層には、いずれ自分はこの世から消えていく存在なのだという無常観があるからなのだろうが、そうではなく、死に対する考え方を切り換えて、死を新しい旅立ちと考えることはできないものか。